

通し番号	5131
------	------

分類番号	R04-26-15-3
------	-------------

ミニトウガン‘ミニトウガン2号’の適正施肥量を明らかにしました

[要約] ミニトウガン‘ミニトウガン2号’（4月定植・6月上旬～10月上旬収穫）では、窒素施肥量の増加に伴い、収量は増加し、植物体の窒素吸収量も増加する。一方、窒素施肥量の多い区で日焼け果は減少傾向になるが、変形果は増加傾向になる。このため、本作型の‘ミニトウガン2号’の窒素施肥量は、20kg/10a程度が適当である。

神奈川県農業技術センター・三浦半島地区事務所

連絡先 046-888-3385

[背景・ねらい]

三浦半島地域では、夏の重要な品目としてミニトウガンが栽培されている。トウガンの栽培では、収量確保のほか、日焼け被害を防ぐため、葉を十分に生育させておく必要がある。そこで、‘ミニトウガン2号’について、上記事項を考慮した適正施肥量を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 ‘ミニトウガン2号’の収量は、窒素施肥量の増加に伴い増加し、すべての区で10t/10a以上である（表1）。
- 2 ‘ミニトウガン2号’の窒素吸収量は、施肥量の増加に伴い増加し、すべての区で約20kg/10a以上である（図1）。
- 3 標準区に比べて、施肥量の多い2倍量区、3倍量区で日焼け果の発生は減少傾向になるが、変形果は増加傾向になる（表2）。
- 4 以上の結果より、ミニトウガンの窒素適正施肥量は、20kg/10a程度が適当である。

[成果の活用面・留意点]

- 1 本試験研究成果は、栽植密度4.6m×1.2m、4本仕立て放任栽培、4月中旬定植・6月上旬～10月上旬収穫での結果である。

[具体的データ]

表1 トウガンの時期別収量 (t/10a)

試験区名	標準施肥区 (窒素10kg/10a)		2倍量施肥区 (窒素20kg/10a)		3倍量施肥区 (窒素30kg/10a)	
	平均値	偏差	平均値	偏差	平均値	偏差
6月	3.9	±1.1	4.7	±1.0	6.0	±0.9
7月	3.0	±0.5	3.2	±1.1	4.3	±1.1
8月	1.9	±0.9	2.0	±0.8	3.5	±1.0
9~10月	2.3	±0.3	2.6	±0.9	4.6	±1.5
合計	11.1	±2.3	12.5	±1.9	18.5	±2.4

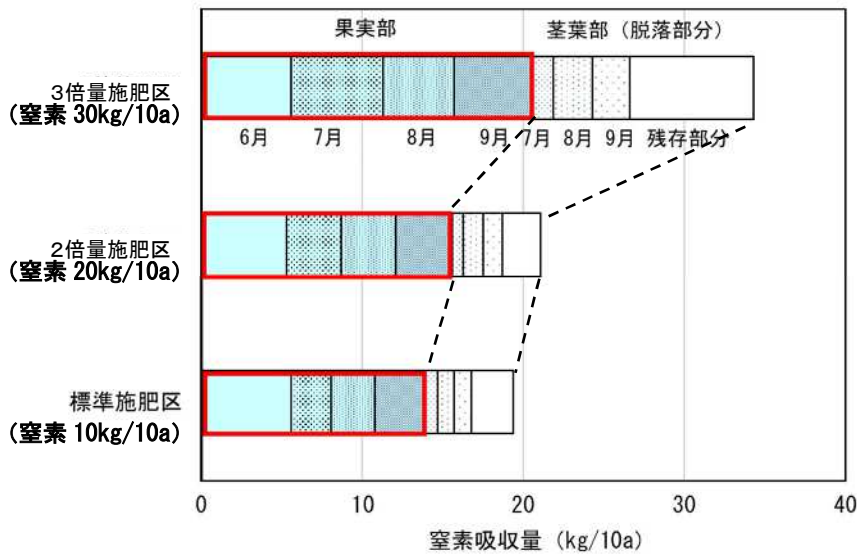


図1 トウガンの時期別窒素吸収量 (kg/10a)

表2 トウガンの障害果発生状況 (個/株)

	標準 (窒素 10kg/10a) 施肥区				2倍量 (窒素 20kg/10a) 施肥区				3倍量 (窒素 30kg/10a) 施肥区						
	全個数	日焼果	傷果	変形果	全個数	日焼果	傷果	変形果	全個数	日焼果	傷果	変形果			
全期間	重度	---	6.8	0.8	4.6	重度	---	6.4	1.2	8.0	重度	---	5.8	2.4	7.6
	軽度	---	9.0	7.6	3.4	軽度	---	7.2	11.8	6.4	軽度	---	4.2	8.0	7.4
	合計	67.6	15.8	8.4	8.0	合計	78.4	13.6	13.0	14.4	合計	95.2	10.0	10.4	15.0
	割合	---	(23.7%)	(12.3%)	(11.9%)	割合	---	(17.7%)	(16.7%)	(18.4%)	割合	---	(10.6%)	(10.9%)	(15.7%)

耕種概要:

播種: 2021年3月1日

定植: 2021年3月30日 畝幅460cm、株間120cm 4本仕立て放任。

収穫: 2021年6月1日~10月12日間に実施。

施肥: 牛ふん堆肥1t、顆粒タイニー100kg、硫酸マグネシウム40kg/10a 全面施用

試験区: (ア) 標準施肥区: 基肥 CDU 複合燐加安、ハイマグB重焼、硫酸加里(N:P₂O₅:K₂O=7:17:18kg/10a)

追肥 NK 化成2号 (N:P₂O₅:K₂O =3:0:3kg/10a) 施用

(イ) 2倍量施肥区: 基肥、追肥とも、標準施肥区の2倍量施肥

(ウ) 3倍量施肥区: 基肥、追肥とも、標準施肥区の3倍量施肥

[資料名] 令和2~4年度試験研究成績書(三浦)

[研究課題名] トウガンの安定生産技術の確立

[研究期間] 2020(平成2)年度~2022(令和4)年度

[研究者担当名] 竹本稔、西野翔